

連載

say

哲也製 心の特産品

かごしま

時の流れには、限りもないし果てもない。そこで、その限らないものを、私たちは年月や季節、さらに曜日や時刻で区切り、自分たちの暮らしにメリハリをつけている。年の瀬とはうまい言葉だなあとと思う。そして、正月が、その中でもやはり一番の節目だ。

昔、日本人は暮らしのパフォーマンスが下手だという評論家が出て、喧嘩したことがあった。とんでもないことだ。たとえば、暮れから年始にかけては、私たちの五感いっぱい正月協奏曲が響きわたった。

目で言えば、ご来光を拝む。晴着が映る。冬を感じさせない緑の松飾りが、目を射る。そして、はや梅は蕾をふくらませている。

耳にはかつて、餅搗きの音や除夜の鐘や神社の鈴、獅子舞の笛太鼓も響きわたった。

鼻には、ユズの香りやお屠蘇の匂い、正月着物のナフタリンの臭さも飛び込んで来た。

そして口は、時にうんざりするほどのおせち料理を頬張った。家もまた、煤払いや門松を立てたり、庭に白砂を撒いたりして、年の神を迎えた。

「昆布はよろこぶに通じるのよ。裏白はね、心の裏まで真っ白ということ。黒豆は、苦勞をまめにするようにね。飾



り餅は、かさねがさね円満であるようにだよ」母は子供の頃に、こう教えてくれた。そんなのは、古き時代の遺跡と同じだという人もいよう。しかし、こんなことしか当てにならないこともあるのだ。

こんなことを当てにしながら、私たちは悲喜こもこもの時の流れを、どんぶらこどんぶらこと流されながら生きて来たような気がする。

ところで昨年の世相を象徴する字は、清水寺によれば、「偽」だったという。偽装や偽造、なるほど鳥の鳴かない日はあつても、「偽」という字がメディアで踊らない日はなかった。

「偽」という字は、二ベンに「為」と書く。「為」はもともと象形文字で、象を手なずける人間の姿を文字にしたものという。巨大な象を手なずけるのだから、そこには並外れた意志がいるだろう。そこから「為す」という言葉にも、この字が当てられるようになったという。

その象を手なずけようとした字に、さらに人間がくっつく。これはもう意志の強さというより、作意以外のなものでもないということになる。だから、いつわりをこの字で表わしたのだ。

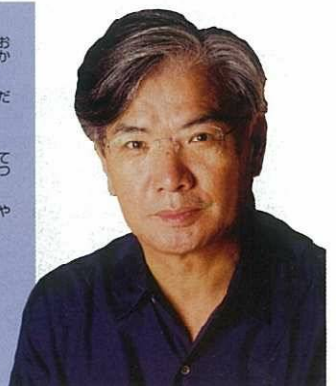
いずれにせよ、「偽」という言葉は、字とこうはらに、ちつとも人の為にはなっていない。

あるいは、人間というもののは欲と道連れの生類だから、とかく人の為すことは、偽りが多いということだろうか。

ホンモノとニセモノだって区別がつきにくいご時世だ。

学生時代、骨董屋でアルバイトをしていた頃、その主人に、とにかくホンモノを見ろ、良いものを目に灼きつけると言われたことがあった。するといつしか、目利きになるというのだ。

第六回 ホンモノとニセモノ



おかだ てつや
岡田 哲也

1947年、出水市生まれ。東京大学中退。詩集「海の陽山の陰」「につぼみ守唄」、現代詩人文庫「岡田哲也集」エッセイ集に「不知火紀行」「夢のつづき」など多数。

近著の物語「川がき 夏」が好評発売中
南日本文学賞受賞。
平成4年度県芸術奨励賞受賞。

骨董に限らず、絵、音楽そして文学もそうだ。ホンモノというより良いものは、それだけ時流に耐えうるものだといいことを、主人は言いたかったのかもしれない。私が今断言できるのは、ニセモノの方がいかにもホンモノらしく見えるということだけだ。

むしろ、ホンモノだから、高額だとか、高尚だというのはない。ニセモノだから、安いかマズイとも限らない。ただ私にとつて、つまるホンモノかつまらぬホンモノか、つまるニセモノかつまらぬニセモノかがあるだけだ。その好き嫌いをきちんと言うことが、この世を楽しく、また風通しよくしてくれるのだと思う。そして、これが作り手の意欲と匠をひきだし、ひきあげてくれるものだ。かく言う私など、人間で言えば、偽りのないまがいの、ホンモノのニセモノなのだ…。